

中学校

平成 7 年 度

教育研究員研究報告書

国 語

東京都教育委員会

平成7年度

教育研究員(国語)

班	地区名	学校名	職名	氏名
作文指導班	品川区	八潮中学校	教諭	松井圭一
	豊島区	池袋中学校	教諭	石見健二郎
	足立区	花畑北中学校	教諭	○関根克洋
	江戸川区	松江第二中学校	教諭	加藤英樹
	青梅市	第三中学校	教諭	直井和雄
	町田市	つくし野中学校	教諭	榎戸美佳
	田無市	田無第四中学校	教諭	小曾戸ときえ
	武蔵村山市	第二中学校	教諭	川島貴行
音声言語指導班	台東区	忍岡中学校	教諭	渋谷剛史
	江東区	第二大島中学校	教諭	金田志津雄
	大田区	東調布中学校	教諭	松尾廣文
	世田谷区	希望丘中学校	教諭	石井天
	板橋区	志村第五中学校	教諭	合田敦郎
	練馬区	田柄中学校	教諭	高橋昇
	八王子市	第七中学校	教諭	◎佐藤千世
	昭島市	昭和中学校	教諭	○坂田厚博

◎=総世話人、○=副世話人

担当 教育庁指導部中学校教育指導課指導主事 新藤久典

目次

I	研究主題設定の理由	1
II	研究の内容	2
1	作文指導班	2
2	音声言語指導班	12
III	研究のまとめと今後の課題	24

生徒一人一人の関心・意欲を高め、論理的な思考を促す指導と評価の工夫

I 研究主題設定の理由

集められた情報を整理・分析することで生まれた発想や意見を、相手に正確に理解してもらえるように発信するためには、発想や意見を生む論理的な思考力と正確に伝えるための構成や展開を工夫する論理的な思考力の二つの力が必要であると考えます。

本部会では、この二つの論理的な思考力の育成に着目し、「表現」領域における指導をとおしてこれらの能力を高める指導と評価の工夫について研究を進めたいと考えました。

「生徒一人一人の個性を重視し、生徒のもっているよい面を引出し、それらが十分発揮できる学習の場を周到に用意すること」は教師の大きな使命の一つである。学校週五日制が月2回実施された今年度、学校現場では教育水準の維持や授業時数の確保等を巡って論議なされ、様々な工夫が展開されている。そのような状況の中で最も重視すべきは学校生活の充実である。1時間1時間の授業の質・内容を高め、主体的に学ぼうとする意欲あふれる生徒を育てることこそ教師の使命であると言える。今、いじめや不登校等、学校生活に安らぎを感じられず、悩んでいる生徒の存在が大きな社会問題として注目を集めている。これらの課題解決の方策として、学校をあげて取り組むべきことは、やはり日常的な授業の改善・充実である。生徒一人一人の学習に対する関心・意欲を喚起し、高める指導方法等の改善工夫は不可欠である。

国語教室の実態を見ると、様々な調査等で指摘されているように、読書離れの傾向、自分の考えを相手に理解されやすいように構成して話したり書いたりする力の不足を憂える教師の声は年々高まっている。また授業以前の問題として、「国語の授業が楽しい、好きである」と感じている生徒の少なさを嘆く声も多い。確かに、全体的傾向としてはそのような面も否定できない。しかし、こうした傾向は生徒だけの責任に帰することはできない。現行の学習指導要領が告示され、授業の改善・充実が求められて7年を経ようとしているが、中学校の国語の授業は、生徒にとって魅力のあるもの、生徒が関心・意欲をかき立てられる指導内容・方法に変わってきているだろうか。国語教師はもう一度、授業の原点に戻り、生徒の国語に対する関心・意欲を高め、国語を尊重する態度を養う方策を学校経営・教科経営の視点から考える必要がある。

本分科会では、「これらの学校教育の課題を国語教育としてどのように受け止めればよいのだろうか」と自問自答しながらこの1年間、この課題について授業実践を通じて解決の方向を探ることにした。特に、現在国語教育に求められている、情報選択能力・情報活用能力の育成、情報の発信者として備えるべき資質、能力の涵養、それらの基礎となる論理的思考力、論理的表現力の育成に焦点をあわせることにした。

以上のような観点から、研究主題を「生徒一人一人の関心・意欲を高め、論理的な思考を促す指導と評価の工夫」と設定し、「表現」領域における作文指導、音声言語指導の二つの側面から授業に基づく実証的な研究を進めることにした。

II 研究の内容

【作文指導班】

研究副主題：「読書感想文で鍛える論理的な思考と表現の指導」— 情報化に対応して —

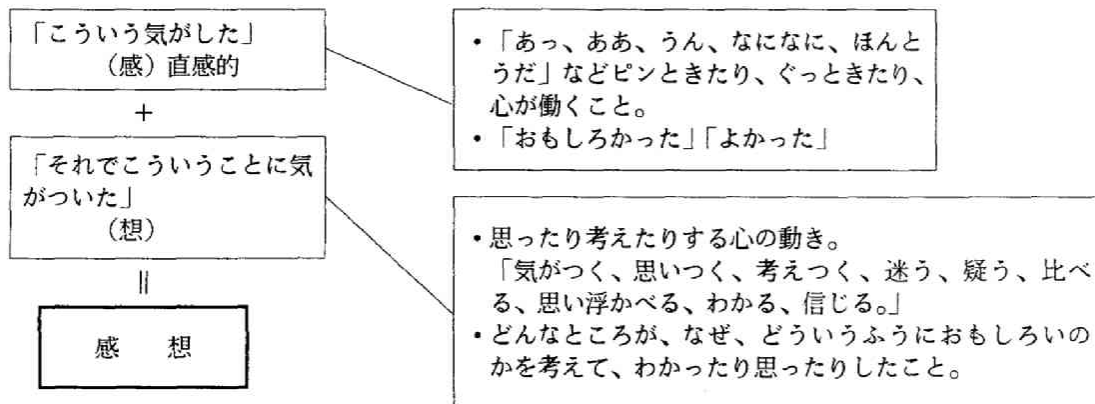
1 独自の感想・意見の重要性

ある事柄について学習者に感想を求めると、「かわいそう」「すごい」など、感覚的でも一言による感想が多く、自分の内面に引き付けた感想は少ない。また、学習者が意見を述べたとしても、それはテレビや新聞の評論家などの意見の受け売りである場合が多い。これは学習者が、氾濫する情報の中で、自分の知識や経験に照らし合わせてその情報を吟味し、普段から自分独自の意見をもつという経験に乏しいからである。

情報化・国際化が進む社会の中で、学習者の論理的な思考力を高め、独自の感想や意見をもてるようにし、それらを論理的に表現できるようにすることが、今、国語の授業者に求められている課題である。

2 読書感想文に注目した理由

(1) 感想文は説明文



感想文とは「直感的に自分が感じとったことと、そういうふうに分かっていたのはなぜか、ということを考えてときに分かったこと・考えたことを、読み手を意識して分かりやすく伝えるように書いた文」ということになる。したがって、感想文は自分の考えを相手に分かりやすく説明するという点で説明文に属していると言える。

(2) 身近な話題に結びつく感想文

国語に対する関心・意欲が低い学習者は、経験したことを客観的にとらえて言語化するのが苦手である。自分が経験したこと以外のことに対しては、「自分とは違う」「初めて知った」などの感想で終わってしまう。そういう学習者にとって、見たり聞いたりしたことや文章を分析する過程で興味や関心をもったことについて、自分の考えや意見をまとめることは難しい。まして作文で相手を意識して分かりやすく伝えることなど困難である。

このような学習者でも、比較的意見が出やすいのは、「学習者の身近な話題に結びつく文章」である。この条件を満たすのは、主人公の年齢が自分に近い文学作品に多い。主人公と自分との生活や考え方の比較という論理的な思考から生じた発想や意見を、読む相手に理解してもらうように、論理的な表現でまとめたものが読書感想文である。

3 読書感想文指導の現状

(1) 計画性に欠ける指導

読書感想文の指導について、本分科会で意見交換した結果、授業などで書かせることはしているが、計画的に指導をしたことはあまりなかったという反省が多く出された。

(2) 学習者の読書感想文に対する意識

計画的な指導を受けていない学習者が、読書感想文に対してどのような意識をもっているかをアンケート調査を基に考察を行った。

読書感想文についてのアンケート結果						
平成7年9月実施 対象人数 1年237人 2年309人 3年252人 合計798人						
1)	あなたは読書をして感想をもつことは大切だと思いますか？	1年	2年	3年	計	
	ア 大切だと思う。	196	242	208	646	80.9%
	イ 大切だとは思わない。	41	67	44	152	19.0%
2) A	あなたは、他の文章と比べて読書感想文を書くことを、どう思いますか？	1年	2年	3年	計	
	ア 得意。	5	10	7	22	2.7%
	イ どちらかといえば得意。	43	64	44	151	18.9%
	ウ どちらかといえば苦手。	99	134	101	334	41.8%
	エ 苦手。	90	101	99	290	36.3%
2) B	上記の質問で「ア」・「イ」と答えた人は、その理由を下から選びなさい。 (複数解答可) <173人>	1年	2年	3年	計	
	① 字数・原稿用紙等の枚数が気にならないから。	9	14	14	37	21.3%
	② 何を書けばいいのかが分かるから。	14	43	24	81	46.8%
	③ どのように書けばいいのかが分かるから。	17	32	22	71	41.0%
	④ その他。	4	5	7	16	9.2%
2) C	2) Aで「ウ」・「エ」と答えた人は、その理由を下から選びなさい。 (複数解答可) <624人>	1年	2年	3年	計	
	① 字数・原稿用紙等の枚数が決まっているから。	34	52	35	121	19.3%
	② 何を書けばいいのかが分からないから。	91	108	105	304	48.7%
	③ どんなふうにかいたらいいのかが分からないから。	130	167	161	458	73.3%
	④ その他。	12	18	11	41	6.5%

この調査により、学習者の80.9%は、読書後に感想をもつことは大切であると思っていることが分かった。しかし、読書感想文を書くことに苦手意識をもつ学習者が78.1%もいることも把握できた。

(3) 計画的指導の必要性

アンケート調査の結果から、学習者は感想をもつことの大切さを認めながらも、感想文を書くことには苦手意識をもっていることが分かった。これは、授業者が適切な指導をしないままに漫然と書かせていることにも大きな原因があると考えられる。授業者の読書感想文に対する曖昧な意識も学習者の苦手意識に影響していると言える。

(4) 現状における学習者の作品分析

実際の学習活動に入る前に、指導上の問題点を明らかにするために、本分科会では学習者が以前に書いた作品の内容と構成を分析し、それを次のように分類してみた。

平成7年9月実施 対象人数 2年147人

(内容面)

① 感覚的表現にとどまっている。	84	57.1%
②ア 自分の体験は盛り込まれているが自分の考えが入っていない。	3	2.0%
イ 自分の考えは述べられているが体験に基づいていない。	48	32.6%
③ 自分の体験に基づいた考えが述べられている。	11	7.4%

(構成面)

① 羅列型。	77	52.3%
②ア 表現上の工夫はあるが構成ははっきりしない。	10	6.8%
イ 構成ははっきりしているが表現上の工夫がない。	50	34.0%
③ 構成も表現上の工夫もしっかりしている。	10	6.8%

この分類から、学習者の作品は、内容面では①、②イで89.7%、構成面では①、②イで86.3%を占めることが明らかになった。また、この傾向は、先のアンケートで読書感想文に対して苦手意識をもっていないと答えた学習者の作品にもみられた。

(5) 読書感想文指導の問題点

読書感想文の指導については、読書嫌いをつくるという視点から不要だという意見もある。しかし、本分科会では読書から得た生き方に対する自分の考えや意見を、相手に説明する重要な指導の一つととらえた。また、学習者も大切であることを認めていることから、問題は授業者の確かな指導計画に基づいた指導の工夫である。授業者は78.1%の学習者のもつ苦手意識を取り除くことができる新しい指導を工夫し、実践していく必要がある。

4 研究のねらい

本分科会では、自分の体験に基づいた考えが論理的な構成で書かれ、しかも相手に分かりやすいような表現上の工夫がなされている作品を優れた読書感想文と位置付け、二つの工夫により学習者の関心・興味を高め、論理的な思考を促す指導を考察し実践することにした。

(1) 「データ作文」—書くための題材を蓄積する指導の工夫

学習者の感想文が感覚的であったり、内容が深まらないことについて、本分科会では日ごろから情報を吟味し、自分独自の考えや意見をもつ機会が少なくなっているからではないかと考えた。そこで、機会あるごとに自分の体験をもとに自分の考えをまとめた短作文を書き、それをデータ(資料・材料)として蓄積しておく作文活動(以後「データ作文」と呼ぶ)が必要であると考えた。

ある文学作品の感想文を書かせることを前提にして、計画的にこの「データ作文」を書いておくという工夫をし、そこにまとめておいた意見と文学作品を読むことによって得られた感想を比較することで、より深い考察がなされた感想文が書けるであろうという仮説を立てた。

(2) 「標準アウトアイン」による文章の構成—書くことの抵抗を和らげる工夫

本分科会では自分のもった感想が論理的に展開できるような文章構成の枠組み—読書感

想文用の「標準アウトライン」—を作成し、そこに文章を当てはめていくことで、構成が整った文章が書けるのではないかという仮説を立てた。

(3) 二つの論理的な思考過程

本研究では、読書体験から得られた考えや意見を、自分の体験や考えと比較することによって新たな発想や考え、意見をもつという論理的な思考の過程と、それを相手にとって最も分かりやすく、しかも誤解を生まないような論理的展開をもつ文章を作成するという論理的な思考の過程が必要になる。本分科会で考えた二つの工夫はこれらの思考を自然に学習できるように計画したものである。

5 指導の実際—教材名：「少年の日の思い出」(第1学年 M社)

(1) 教材選定の基準

①学習者の身近な話題に結びつく文章、②登場人物の年齢が学習者に近い文学作品、③学習者が似たような経験をしていて、身近に感じられる作品、以上の基準から、第1学年では「少年の日の思い出」を選定した。

(2) 展開例

学 習 指 導 計 画

全体指導計画(全11時間扱い)

第1時…読書感想文についてのアンケート調査結果の分析。感想文のサンプルを提示し分類する。

第2時…テーマを選択してデータ作文を書く。(用紙①) ※参考資料A参照。
(今回のテーマ)

- ア 他人のことや持っているものをうらやましく思った経験。
- イ 友達が大事にしているものをなくしたり、壊したりした経験。
- ウ 謝っても許してもらえなかった経験。
- エ 謝られても許せなかった経験。

第3時…「少年の日の思い出」の範読を聞き、初発の感想をまとめる。(用紙②) ※参考資料B参照

第4時～第6時…内容読解

第7時…データ作文と関連する部分を作品中からさがし、データ作文と同じ形式でその部分をまとめる。データ作文と作品の内容との関連を押さえる。(用紙③) ※参考資料C参照

第8時…第2時と第7時で書いたもので、自分の考え、意見と「少年の日の思い出」を読んで得られた感想を比較し、考え、意見を深める。(用紙④) ※参考資料D参照

第9時…今までの用紙を、標準アウトライン(用紙を②①③④の順)を使って構成し、原稿用紙に感想をまとめる。

第10時…感想文の構成を工夫し、独自の感想文にする。だれかの感想文をサンプルにしてより的確に感想を伝えるにはどうしたらよいか全員で構成を工夫する。

第11時…前時を参考にして、各自が構成を再度工夫する。

(3) 参考資料：学習プリント（第2、3、7、8 時で使用したもの例）

A

国語 読書感想文 作成シート ① | 学年 書名 ()

1. 読書感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

項目	内容	ポイント
1. 導入	読んだ本のタイトル、著者、主人公、あらすじを簡潔に書く。	
2. 感想	自分が感じたことや考えたことを具体的に書く。	
3. 結論	自分の感想をまとめて、読者のために一言を添える。	

B

国語 読書感想文 作成シート ② | 学年 書名 ()

2. 読書感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

項目	内容	ポイント
1. 導入	読んだ本のタイトル、著者、主人公、あらすじを簡潔に書く。	
2. 感想	自分が感じたことや考えたことを具体的に書く。	
3. 結論	自分の感想をまとめて、読者のために一言を添える。	

C

国語 読書感想文 作成シート ③ | 学年 書名 ()

3. 読書感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

項目	内容	ポイント
1. 導入	読んだ本のタイトル、著者、主人公、あらすじを簡潔に書く。	
2. 感想	自分が感じたことや考えたことを具体的に書く。	
3. 結論	自分の感想をまとめて、読者のために一言を添える。	

D

国語 読書感想文 作成シート ④ | 学年 書名 ()

4. 読書感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

● 感想文の書き方について

項目	内容	ポイント
1. 導入	読んだ本のタイトル、著者、主人公、あらすじを簡潔に書く。	
2. 感想	自分が感じたことや考えたことを具体的に書く。	
3. 結論	自分の感想をまとめて、読者のために一言を添える。	

【参考資料】第9時における生徒の読書感想文の例

この物語を読んで、まず思ったことが、「人間にとって、「我慢」ということは一番難しいのかもしれない」ということ—。

最初は、僕の心がうまく読み取ることができませんでした。どうして十二歳になっても欲しいものを我慢できなかったのか。盗みをしてしまったのかと思っていましたからです。しかも、ちょうを採集したものだと思ったうえで、ポケットに入れてしまうなんて許せませんでした。しかも、エーミールに謝りにいく気にならなかったなんて、とても考えが甘い男だなあと思いました。

しかし、このようなことを言っている私にも、本当は同じような経験をしたことがありました。それは、五年前の夏のことでした。友達の家遊びにいった時、友達は小さなプラスチックケースに入ったかわいい魚を見せてくれました。あまりにも魚が小さく、もっと近くで見たいと思った私は、ふとケースを手で持ち上げ、グッと顔にケースを近づけようとしてしまいました。するとその瞬間、手をすべらせて思わずケースを落としてしまったのです。中の魚の半分を殺してしまった私。魚をよく見たいという欲をもっていたのがよく分かりました。この物語の僕もクジャクヤママユがほしいという欲から盗みをしてしまったのだと思いました。

あのできごとの後私は、友達に何回も謝り、自分をせめました。なぜ、ケースを友達の許しを得ずに手に持ってしまったのだろうと。友達は、ショボンとした私をすぐ許してくれましたが、心の中ではくやしかったと思います。この作品の中のエーミールも、クジャクヤママユをつぶされたとき、僕にはきざな言葉を言ったけれど、腹の中ではとてもがっかりしていたのではないのでしょうか。なぜなら、クジャクヤママユはエーミールにとっては、汗と涙の結晶なのだから。

この物語を読んで、我慢は本当に簡単なようで難しいことだと思いました。なぜかと言うと、私もこの物語の僕も、我慢ということを忘れてしまい失敗をしてしまったからです。しかも、僕の場合はエーミールにあきれられてしまい、これから一生エーミールに悪い人だと受けとられながら、生きていかなければならなくなってしまったように思います。私はつくづく我慢は何事にも必要だと感じました。

6 指導の効果

(1) 授業を終えての学習者の感想

- いつもなら「おもしろかった」で終わっていたのが、今回は自分の思っていることを少し書けたのではないかと思う。
- 感想文は自分の感じたことだけを書くものだと思っていたが、読むきっかけ、自分の体験なども取り入れるなど、奥が深いんだなと思わされた。でも、いざ、自分でそういうことを取り入れて書こうと思っても、なかなかうまくいかない。本当に難しいと思った。
- 印象に残ったことと、自分の体験とを照らし合わせることにより、とても納得のいく文章になることなど、「なるほど」と思った。

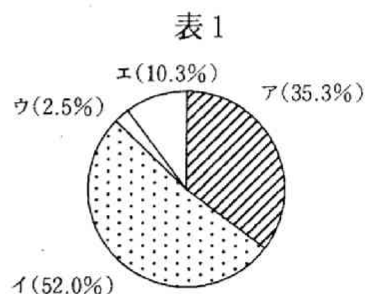
- 以前よりも、自分の体験談、自分の意見、また、登場人物を自分と比較してみたり、登場人物の心理を予測したり、いろいろなことがすらすら書けるようになった。
- 自分の考えや立場を明確にすると、文章を書くのがそれほど苦でなくなった。
- 本の中のことと、自分の体験を比較したりすることで、本の内容に少し近づけたような気になった。
- 自分とその話の内容を対比させて、共通点・違うところなどを発見することは、自己を見つめることにつながると思った。感想文を書くことで自分のこともよく、分かったと思った。
- 今までは、思ったことをだらだらかいていたけど、本当はこのように構成を考えて自分の意見を十分に入れればいいんだなと思った。
- 自分の考えを相手に分かってもらえるように書くのは難しいけど、とても必要なことだと思った。
- 一つずつ項目に分けて書いていたらいつのまにか1200字も書いてびっくりした。自分でもこんなに書けるんだなと思った。
- できたときの気持ちは、なにか「やり遂げた」という気持ちでとても良かった。なにせ僕が4枚も書いたんだから。初めは「そんなに書けないよ」と思ったが、やってみるとそうでもなく、けっこう楽しかった。「やればできる」というのはほんとうだと思った。
- 思ったより、書くことが楽しくて、よい本を見つけたらまた書いてみようかなという気になった。
- 感想文を書くと言われたとき、すごくいやだったが、書いているうちにとても楽しくなって、今までできなかったことができて、とても良かった。まだ、下手だけど、感想文を書くことがこんなに楽しいとは思わなかった。

(2) 授業後におけるアンケート調査の結果

* 学習者に読書感想文の指導を受ける前と、後とを比較させた。

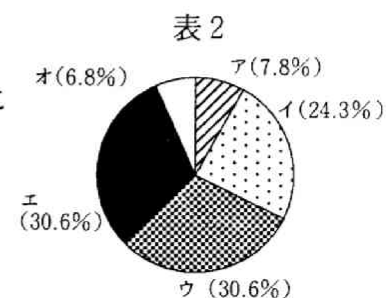
① 読書をして感想をもつことを大切だと思うようになりましたか

- ア 以前と同じく大切だと思う
- イ 以前に比べて大切だと思うようになった
- ウ 以前に比べて大切だと思わなくなった
- エ 以前と同じく大切だと思わない



② 読書感想文をどのように書いたらよいかについて

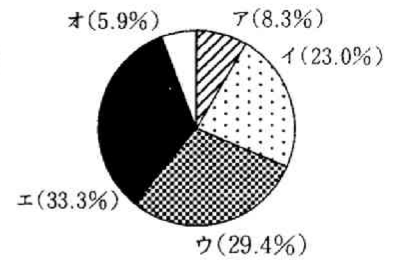
- ア 以前から考えていたものを確認することができた
- イ 以前は分かっているつもりだったが、そうではないことが分かり勉強になった
- ウ 以前は分からなかったが、勉強してよく分かった
- エ 以前は分からなかったが、勉強して少しは分かった
- オ よく分からない



③ 読書感想文に何を書いたらよいかについて

- ア 以前から考えていたものを確認することができた
- イ 以前は分かっているつもりだったが、そうではないことが分かり勉強になった
- ウ 以前は分からなかったが、勉強してよく分かった
- エ 以前は分からなかったが、勉強して少しは分かった
- オ よく分からない

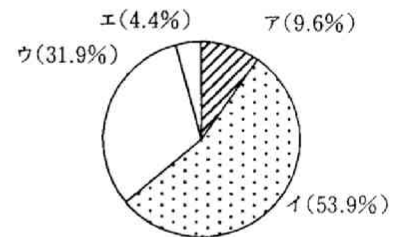
表3



④ 実際に読書感想文を書いてみて

- ア 以前よりとても満足のいく文章が書けた
- イ 以前より少しは満足のいく文章が書けた
- ウ 以前とあまり変わらない
- エ 以前より満足できない文章になった

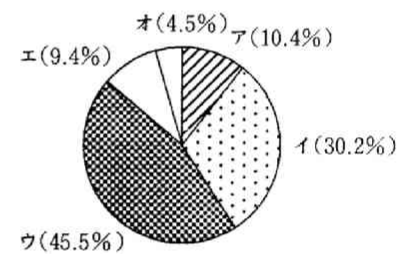
表4



⑤ 感想文の量について

- ア 以前と同じようにたくさん書けた
- イ 以前と比べ、かなりたくさん書けた
- ウ 以前と比べ、少しは量が増えた
- エ 以前とあまり変わらず、あまり書けなかった
- オ 以前と比べ、書く量が減ってしまった

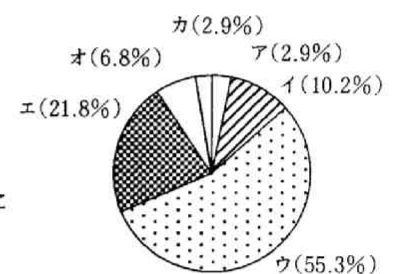
表5



⑥ 読書感想文を書くことについて

- ア 以前も得意だったが、さらに得意になった
- イ 以前と同じく得意だ
- ウ 以前は苦手だったが、苦手意識が薄くなった
- エ 以前と変わらず苦手だ
- オ 以前は得意のつもりだったが、かえって苦手になった
- カ 以前も苦手だったが、さらに苦手になった

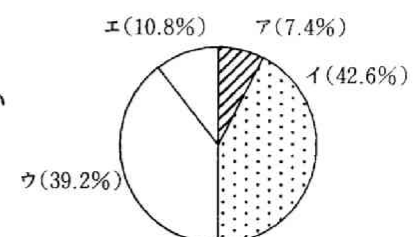
表6



⑦ 読書感想文に対する興味について

- ア とても興味もてて、また書いてみたいと思う
- イ 少しは興味もてて、書いてみてもいいと思う
- ウ あまり興味もてず、それほど書きたいとは思わない
- エ 全く興味もてず、書きたくない

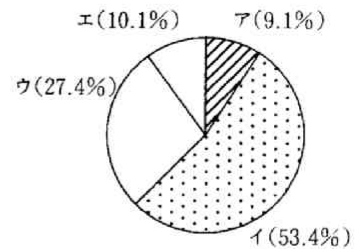
表7



⑧ 今回の読書感想文の授業について

- ア とても楽しかった
- イ わりあい楽しかった
- ウ あまり楽しくなかった
- エ 全く楽しくなかった

表8



*平成7年10月実施、対象：第3学年（216名）教材「故郷」（S社）

7 指導上の留意点、気付いた点

第1時

- ・自分の意見をもつことの大切さを認識させる。
- ・読書感想文の意義、重要性を学習者に理解させる。

第2時

- ・データ作文の完成を急がせない。（テーマを示してから、自分の体験をじっくりと振り返らせるための時間を十分にとらせたい。）
- ・読書感想文を書く時に準備するようなデータ作文ではなく、日頃から、いろいろなテーマで書かせておくことが大切である。
- ・個々の学習者が、自分が今やっていることが何につながっていくのかを意識させる工夫が必要である。

第8時

- ・一つの感情表現（「よい」「好きではない」「かわいそう」「すごい」）だけで、学習者が物事に対して意見を述べたようなつもりにはさせない。
- ・文学作品の登場人物の体験と、学習者自身の体験をより具体的に比較させるためには、両者の場面や状況を正確にとらえさせることが必要である。
- ・学習者に、相手を認識して、的確に自分の意見や感想を伝えるための工夫をさせる。

全体をとおして

- ・学校行事、その他で学習者に作文を書かせる場合、常に学習者がその後の作文活動でデータとして活用できるように、自分の考えや意見、その時の状況を記録させるとよい。
- ・個性的な意見は、個人の知識や経験が影響するので、様々な視点で物事を見る態度を常に意識させる指導が大切である。

8 考察

本分科会では感想文を、自分独自の意見や考えを分かりやすく相手に伝えるための論理性が求められる説明文ととらえて研究を進め、次のような成果を得ることができた。

- (1) 「6 指導の効果」（7ページ）で示されているように、学習者の読書感想文に対する苦手意識は、かなり薄らいでいる。作品の内容も、自分の体験を折り込み、意見を述べ、

主人公の心情と比較することにより、感覚的なものから思索的なものへと深められた。

- (2) 「データ作文」によって、「何を書いたらいいのか分からない」学習者に、自分の体験と作品とのかかわりを中心に書くことを理解させることができる。また、「データ作文」は、三年間の学習を見通した上で、計画的、継続的に蓄積されると効果的であると考え。国語科の授業だけにととまらず、道徳や学校行事等の後の作文や事後学習においても自分の体験を見つめさせ、考えを深めさせるように配慮したい。
- (3) 「標準アウトライン」を示すことにより、「どう書いたらいいのか分からない」学習者に、構成を意識させ、それまで書きためた「読書感想文用紙①～④」をまとめることによって1200字程度の感想文を書かせることができた。また、感想文に対する意欲が高い学習者には、「標準アウトライン」を乗り越えさせることによって、独自性のある論理的な構成を工夫させることができる。
- (4) 学習者がそれぞれの学習課題を解決することができたかどうかを、用紙にまとめられた内容から評価することができる。

情報が氾濫し、めまぐるしく変化する社会の中で生きる学習者たちにとっては、今までの生活をじっくり振り返って自分の体験を掘り起こし、考えを深めていくことは容易ではない。しかし、今回の学習をとおして自分の生きてきた過程を見つめ直す機会がもてたとしたら、今後の生き方を考える上でも大切な姿勢を学んだことになる。

しかし、その一方で、書くことそのものに関心・意欲が低い学習者にとっては、「データ作文」を書いたり、用紙をまとめていく作業がうとましく感じられることもあったようだ。日ごろから機会あるごとに短作文に取り組みせ、書くことへの抵抗感を和らげておくようにしたい。また、授業者自らが自分の人生や体験を率直に学習者に語り、学習者が自分の体験を率直に記せるような学習者と授業者との信頼関係を築いておくように心がけたい。

なお、今後の課題として次の点が挙げられる。

- (1) 「データ作文」活動の計画的・継続的指導に伴う工夫

授業者は、「データ作文」を無計画に書かせるのではなく、学習者が自分独自の考えや意見を無理なく論理的に表現できる工夫、学習者の内発的動機付けが高まる工夫をすることが大切である。また、「データ作文」の蓄積には、今後、コンピュータを活用した処理も考えられるとよい。

- (2) 的確に自分の考えや意見を伝える文章構成の工夫

自分の考えや意見を相手に対して的確に伝えるには、論理的な思考に基づいた文章構成の工夫が必要不可欠である。授業者は、学習者自らがより効果的な表現方法を工夫していくような指導を今後も引き続き研究していく必要がある。

- (3) 生徒自らが授業の成果を意識できる評価（自己評価・相互評価）の工夫

授業者は、授業の成果が学習者一人一人に感じられる評価方法について、今後、ますます重視すべき個別化・個性化に対応できるよう更に研究を深める必要がある。

【音声言語指導班】

研究副主題：「聞き取る力を伸ばし、論理的思考を高める指導の工夫」

1 基本的な考え

情報化の波は、急速に学習者に迫っている。テレビ等のマス・メディアからは、実に多種多様な情報があふれている。しかし、過度の情報化は、学習者からコミュニケーションする意欲を失わせているようだ。ファミコンなど学習者と機械のかかわりは密になっているが、その反面、人間同士心を通わせるコミュニケーションの機会を失わせている。

また、情報とは、本来、自分にとって必要か否かを選択し、活用すべきものである。しかし、国語教育において、情報の取捨選択能力を高める指導法や、コミュニケーションを促すような指導の開発は必ずしも進んでいるとは言えない。

本分科会では、前述のような生徒のおかれた状況を踏まえ、情報化社会を生きる力としてのコミュニケーションの能力の育成を前提に、他者の発信した情報を論理的に聞き取る力を育てる指導を模索した。

まず、生徒の実態を調査した。学習者の国語の授業に対する関心が、本実践を通して、どのように変容するかを調査する「関心度調査」と、同じく本実践を通して、学習者の「論理的思考」がどのように高まったかを調査する「論理的思考調査」を、実践前後に行った。

次に、他者からの情報を論理的に聞き取る力を確かめる「聞き取りトレーニング」を一定期間実施した。このトレーニングで高めた聞く力を発揮する指導として、「記者会見」を体験させる授業を実施した。これは、「記者会見」という場の中で、情報を聞き取り、その情報を、ニュース原稿にまとめるために必要に応じて取捨選択させることをねらいとした授業である。そして、最終的に、記者会見で集めた情報を班ごとに「ニュース番組」としてまとめさせた。この作業の中で「聞く」とともに「話す」「話し合う」を含めた音声言語の総合的な力が高められると考えた。

2 仮説

本分科会では、以上のような基本的な考えをもとに、次のような仮説を立てて、授業研究を中心に仮説の実証を試みた。

「聞き取りトレーニング」「記者会見」という実践を通し、①聞くことに対する姿勢・態度・意欲を高めることができる。②要点把握の力が高まり、論理的思考が育つ。③国語の授業に対する興味、関心を高めることができる。

3 研究方法

音声言語班では、仮説実証のため、実践前後に実践前調査（以後「プレ・テスト」と呼ぶ）、実践後調査（以後「ポスト・テスト」と呼ぶ）を実施した。このテストは大きく二つに分けられる。第一は国語に対する生徒の関心度調査である。第二は論理的思考調査である。いずれも今回の授業の効果を分析する手だてとして実施した。その実践概要は以下の通りである。

- ・プレ・テスト（平成7年9月初旬） 関心度調査・論理的思考調査
- ・聞き取りトレーニング・記者会見（平成7年9月中旬～10月中旬）
聞き取りトレーニング（本実践では8回）、記者会見（全6時間）
- ・ポスト・テスト（平成7年10月中旬）、関心度調査・論理的思考調査

4 指導内容

(1) 指導のねらい

本分科会では、音声言語の基礎は「聞くこと」であると考えた。そこで相手の話を集中して聞くことのできる生徒を育成するための第一歩として、「聞き取りトレーニング」を実施することにした。次に、このトレーニングの成果を発揮できる場として、「記者会見」を設定した。さらに、その会見で得た情報をニュース原稿にまとめ、ニュースとして発表させる「ニュース発表」へと発展させていった。この一連の授業を行うことによって以下のような総合的な力を育成することができると考えた。

ア 相手の話を聞こうとする態度、正確に聞き取る力

イ 情報を収集し、取捨選択する力

ウ 話の要点を把握する力

エ 情報を分かりやすく構成する力

(2) 研究の内容と教材の効果

ア 聞き取りトレーニング

週に2回程度、授業の初めに10分間程度で行う。新聞等で生徒の興味をひきそうな記事や短い文章を探し、ゆっくり2回読む。次に読んだことに関する質問をして、解答用紙に書かせる。はじめは集合場所の連絡など、箇条書きの簡単な文章（質問の答えを単語で答えられるようなもの）から始め、慣れてきたら、次第に文章を難しくする、文で答える質問をする、2度読みを1度読みに変える等、程度を高めていき、最終的には感想も含め、100字程度にまとめる作業に発展させていく。

◆本教材の長所と期待される指導の効果

- ◎ 授業のはじめに短時間で継続的に行うことができる。
- ◎ 集中して聞くという訓練を積むことで、聞く態度を身に付けさせることができる。
- ◎ トレーニングを発展させ、要点把握の力や長文読解の力を高めていくことができる。
- ◎ 大切なことをメモにとるという習慣を自然と身に付けさせることができる。

イ 記者会見を利用したニュース番組作り

聞き取りトレーニングで付けた力を発揮する場を生徒に与える。ただ聞くだけでなく、記者会見の中で、会話のやり取りの内容を把握するという高いレベルの聞き取りを体験させる。以下の手順で指導を行う。

- ① 部活で全国大会に出場した、夏休みに自転車で北海道を旅した等、生徒の中からニュースになりそうな体験をもつ者をあらかじめ選んでおく。適当な生徒がいない場合は教師のほうで生徒の代役となる。形態として、記者会見を受ける生徒（会見者）1名、会見の進行役の生徒1名、他の生徒は、6班に分かれ机をつけて前方を向く。意欲づけのためにそれぞれの班がTV局という設定とし、生徒は会見を取材する記者とする。
- ② 進行役生徒の司会により、記者会見を開始する。この会見で話される内容について、すべての生徒は聞き取りメモに会見のやり取りを書いていく。初めに、代表質問と称し、進行役が会見者に幾つか質問を行う。ただしこの部分は、あらかじめ質問と答えを用意した台本に沿って行い、その中には取捨選択能力を試すため、本題とあまり関

係のない質問を混ぜておく。

- ③ 代表質問が終わったら、各班ごとに、他に聞いてみたい質問を時間をとって考えさせる。この際、質問事項に優先順位をつけておく。
- ④ 質問がまとまったら、各班ごとに局名を書いたカードを掲げ、代表者が質問する。これらの質問については、会見者はその場で考えて答えることになる。そして、すべての記者はそのやり取りをメモにとり、記事を書く材料とする。
- ⑤ 記者会見が終わったら、聞き取りメモに書き取った事柄について必要なこと、不必要なことを○△×の記号で分類し、見出しとなるタイトルを考える。班の中で、お互いの聞き取りメモをもとに編集会議を行い、最終的に各班ごとに1つのニュース原稿を完成させる。その際、ニュースのテロップとしてみせる「タイトル」(見出し)も一緒に考えさせる。
- ⑥ 各班からニュースキャスター役の生徒が出て、ニュース原稿を読み上げる。このとき、タイトルを紙に書いたカードをテロップとして出す。読み上げられたニュースについて、他の班の生徒は、手元の評価表に、事実がしっかり伝わっているかなどについて相互評価を行う。

◆本教材の長所と期待される指導の効果

- ◎ 記者会見の中身をしっかりと聞いていなければ質問も考えられず、学習に参加できないため、集中して聞くことができる。
- ◎ 記事作成に向けて、聞き取った情報の取捨選択能力、要点把握の能力を身に付けさせる中で論理的思考を高めていくことができる。
- ◎ 聞き取った内容を順序よく組み立ててニュース原稿にまとめることをとおして論理的な思考を高めていくことができる。
- ◎ 生徒の興味・関心を引き出すことができる。
- ◎ 記事を書く際、多様な活動の場が用意されているので、すべての生徒がいろいろな場面で力を発揮できる。また、相互評価する中で、自分の力に気付き、さらに高めていこうする意欲を喚起することができる。

5 授業で見られた学習者の変容

以下は、学習者の感想文である。

(1) 要点を把握しながら、聞くこと、書くことができるようになった例

- ・作文や人の話を聞く時は、要点を自分で探して聞くとよく理解できることが分かった。
- ・話の中にはいくつかの言葉があり、一つの言葉にはたくさんの言葉がくっついている。そのひとつの言葉を見つける大切さ、要点を見つける大切さを学んだ。
- ・聞いて、それをまとめる力がついた。普段の授業でやれないことをやったと思う。
- ・要点を書かなくても頭の中で整理することができるようになった。
- ・しっかりと話を聞き理解すること、そして要点を自分なりにまとめることを学んだ。
- ・聞いてメモを取る力が身に付いたと思う。記者会見なども、他の班の質問や会見をしている人の言ったことを全部書くのではなく、大事な所だけを書くということも、この授業を通して分かった。

- こんな私でも、ちゃんと文章の中から、大事なものを書き取ったりできるんだなあと思いました。それと自分達がメモしたのから文章ができるんだと思いました。

(2) メモする力と聞く力の向上が見られた例

- 少しくらい早い言葉でもメモすることができるようになった。本当に役に立つ。
- 記者会見の時、聞き取りトレーニングをやった成果で、鉛筆がすらすらと動いた。聞き取りができるようになり、メモも速くなった。

- メモは、とても大事だと言うことを教えられました。要点だけを書き、必要でないことは書かない力もつきました。
- 授業中、集中できるようになった。
- 前より話を真剣に聞けるようになった。

(3) 興味・関心をもち学習することができた例

- 最初は、聞き取りなんてやりたくないと思っていたけれど、そのうち楽しくなってきた。そして記者会見、ニュース原稿の発表ができて「なるほど！」と感心した。中学校の授業に足りないのは学ぶ楽しさだと思う。だから、この授業は最高だと思った。
- 僕は話を聞くのがあまり好きでなかったが聞き取りトレーニングをやって少し話を聞くのが好きになった。これからもちゃんと話を聞こうと思った。

6 指導展開

- 第1時 記者会見の意義、やり方の説明、ビデオによる形態の確認。
今後の授業計画の確認。(学習プリント1) ※P.18参考資料参照
- 第2時 班内の係分担を決める。簡単な記者会見を練習として実施。
- 第3時 記者会見 個人で聞き取りメモの作成 タイトル(ニュースの見出し)を決める。
(学習プリント2) ※P.18参考資料参照
- 第4. 5時 班ごとにニュース原稿作成 タイトルつけ。
(学習プリント3) ※P.19参考資料参照
- 第6時 ニュース原稿読み上げ、評価表による相互評価。
(学習プリント4) ※P.19参考資料参照

* 上記の計画の前に「聞き取りトレーニング」を8回(プレ、ポストテスト別)実施している。 ※P.20参考資料参照

[同一学習者によるメモ能力の変容]
メモの質・量に大きな差が見られる

＜プレ・テスト メモ＞

() 立 () 中学校
() 年 () 組 () 番氏名 ()

難しい語
風味(ふうみ) 麴(こうじ) 和紙(わし)
フウミ コウジ ワシ

メモ欄

アメリカ みそについて 調味料 たくさん
作る時 気温がたかい時 大豆から かんそう
させる 地いきでちがう こうじ 赤 白 ま
まから げんえん

＜ポスト・テスト メモ＞

ネスラー試薬・しょう酸銀溶液・過マンガン酸カリ溶液・塩素・有機物(脂肪、タンパク質、炭水化物等)りゅう酸

メモ欄
私たちはたくさん水
例えば川、水道、雨の水たまり、
水はつねにある 水によって生きている
水をきれいとかきたないとかいうだけ
この方法

1. 水に色がついていないか
黄色
2. ネスラーしかま、白いかみ
黄→赤 アンモニア
3. しょうさんぎんようえき
白い 塩素
4. かマンガンさんカリようえき
りゅうさん 有き
色がなくなる

雨は不純物なし プール アンモニア
あらかわ アンモニアくさった葉
あふろ アンモニアがだんだんふえる
えんそ へる

第3時

時間	学習内容	生徒の活動	教師の動き 注意事項
5分	導入 今回の授業の流れ確認 各係を確認	プリントなどで確認する	記者（質問者）には、特に念入りに確認させる。
30分	展開 記者会見 会見内容説明 代表質問 その他の質問を考える 各社質問	会見者入場（拍手） 聞き取りメモに記入する 聞き取りメモに記入する 各TV局（班）ごとに相談 質問内容を吟味し、優先順位をつけておく 各TV局の代表者質問 他の生徒は聞き取りメモに記入する	内容を録音しておく 司会進行の手助け メモを取る時間を確保 次の質問を混ぜておく ◎会見の本題がわかる質問 ◎本題と無関係な質問 ◎会見者の意見が分かる質問 机間指導 会見のルール ◎基本的には各社一質問ずつ ◎関連質問は進行役の判断で、適宜受け付ける 司会進行の手助け
10分	聞き取りメモの完成	記事に必要なものかどうか 取捨選択（聞き取りメモに○△×をつける）する 自分なりのニュースタイトルを考えて記入する	机間指導 次の授業で班内でひとつにまとめることを説明

5分	まとめ 次回の予告	次回活動する係は何かを知る	次回までに用意しておく物を説明しておく 活動する係には適宜助言を与えておく
----	--------------	---------------	--

第6時

時間	学習の内容	生徒の活動	教師の動き 注意事項
5分	導入 本時の学習内容の確認	評価表を受け取る	評価表配布
25分	展開 原稿読み上げ練習 原稿読み上げ	ニュースキャスター役の生徒の読み上げ練習に班が助言する ニュースキャスターの生徒は前に出る。(サブキャスターはタイトルを掲げる)	
15分	相互評価	読み上げる班以外の班は評価表に記入 以下、全6班分発表し、相互評価する。挙手により発表する	各班の評価結果について助言する
	自己評価	他の班の記事と自分の記事を比較し、優れている点と劣っている点をプリントに記入する	
5分	まとめ この学習から何を学んだかを確認	確認したことをプリントに記入する	

【参考資料】聞き取りトレーニング問題例（第1回）

<問題文>

裕一君と健治君は夏休みを利用してサイクリングを計画しました。健治君の家で7月30日、午後1時に集まることにしました。当日になって、裕一君は貴君にも声をかけ、結局三人で行くことになりました。三人の行きたい所がそれぞれ違って、なかなかまとまりません。その日は計画だけを立てて終わりました。決まったことは次のとおりです

1. 実施日時 8月5日 7時～16時
2. 集合場所 片平神社
3. 目的地 高尾山
4. 持ち物 水筒、お金（いちおう1000円ぐらい）、タオル、地図、お菓子、Tシャツの予備、雨具
5. 注意事項
 - ・決行の日までに自転車の整備をよくしておくこと。
 - ・時間に遅れないこと。
 - ・当日元気な身体で来ること。
 - ・雨が降っても集合場所に来ること。

<質問文>

- 質問1・最後に参加することになったのはだれですか。
質問2・夏休みに何をすることを計画しましたか。
質問3・実施する日は何日ですか。
質問4・注意事項はいくつありましたか。

【参考資料】聞き取りトレーニング問題例（第5回）

<問題文>

『あちらへふわり、こちらへふわり、大昔、琵琶湖は三重にあった。』

琵琶湖は600万年前に三重県の上野盆地で誕生したあと、北方へ順次移動、40キロほど移ったところでいったん消滅した。ところが、100万年前に大津市付近に復活、次第に北東に広がり、現在の姿になった。—横山卓雄・同志社大教授は、琵琶湖の変遷史をまとめ京都市で開かれている万国地質学会議で28日、発表する。

横山教授は、琵琶湖跡とみられる地層の年代を測定し、化石などを分析した。82年から85年にかけて京都大学の研究者らが行った琵琶湖のボーリング調査の結果なども加えて、琵琶湖の移り変わりを推測した。

琵琶湖は600万年前、三重県の上野盆地で直径数キロの湖として生まれた。フィリピン海プレートの活動による地殻変動で次第に北方に移り、550万年から400万年前は三重県大山田村あたりに存在した。400万年から250万年前には滋賀県の甲賀町、250万年から180万年前は蒲生町、180万年から130万年前に八日市市付近にあったという。

130万年前に一度消滅したが、100万年前に大津市付近でよみがえり、いまの南湖にあたる部分ができあがった。その後、80万年前には北湖の南部、40万年前になると北湖の北部ができたという。

琵琶湖はいまも、東北の方向に年間3センチほどの速さで移動しているといわれ、横山教授は「南湖から順に消滅する運命にある」と話している。

（朝日新聞 平成4年8月26日）

<質問文>

- 質問1. 琵琶湖が誕生した場所は、どこですか。
質問2. 一度消滅した琵琶湖は、いつごろ復活したのですか。
質問3. 琵琶湖はどうして移動するのでしょうか。その理由を答えよう。
質問4. 琵琶湖が移動する特徴を説明してください。

7 考察

(1) 関心度調査

ア 調査の目的

「聞き取りトレーニング」及び「記者会見」(以下、「実践」と呼ぶ)の教育効果を興味・関心という観点から分析した。

イ 「関心度調査法」の開発

以下の項目による調査紙法を開発し、実践前後の国語授業への関心を測定した。

関心度調査項目

・国語の授業は(①②③⑤⑧) 国語の授業では(④⑥⑦⑨) 国語の授業で(⑩)

- | | |
|-----------------|---------------------|
| ① おもしろい。 | ⑥ 自分の考えが深まる。 |
| ② 分かりやすい。 | ⑦ 毎時間新しい発見がある。 |
| ③ きゅうくつに感じる。 | ⑧ 自分にとってためになる。 |
| ④ 人の話をしっかりと聞ける。 | ⑨ 自分の考えを論理的に表現している。 |
| ⑤ 楽しみに感じている。 | ⑩ 長い話を聞くのはつまらない。 |

表1 実践前後の「関心度調査」の平均値の比較

項目	プレ・テスト(SD)	ポスト・テスト(SD)	項目	プレ・テスト(SD)	ポスト・テスト(SD)
①	3.016 (0.721)	2.928 (0.797)	⑥	2.648 (0.870)	2.688 (0.763)
②	3.028 (0.734)	2.996 (0.756)	⑦	2.496 (0.765)	2.584 (0.792)
③	2.384 (0.788)	2.264 (0.781)	⑧	3.244 (0.716)	3.228 (0.748)
④	2.936 (0.751)	2.952 (0.714)	⑨	2.544 (0.853)	2.580 (0.812)
⑤	2.380 (0.812)	2.584 (0.831)	⑩	2.476 (0.964)	2.392 (0.911)

※プレ・テスト=実践前調査 ポスト・テスト=実践後調査
表中の数値は平均値。()内はSD=標準偏差。
n=250(中学1年生)

回答方法は、「そう思う」、「ときどきそう思う」、「あまり思わない」、「思わない」の4件法とした。

項目①、②、⑤、⑦、⑧は授業に興味に対する興味・関心を、④、⑥、⑨は技能を、③、⑩は反転項目とし、実践が及ぼすマイナス効果を測定することを目的とした。

関心度を数値化するため、試みに「そう思う」に4、「ときどきそう思う」に3、「あまり思わない」に2、「思わない」に1点をそれぞれ負荷点として与え、処理をした。

ウ 結果

最も被験者の多い中学1年生(n=250)の結果をここでは検討する。実践前後の「関心度調査」の平均値の変化を表1に示す。表1からは、七つの項目(③、④、⑤、⑥、⑦、⑨、⑩)に平均値の向上がみられることが分かる(但し、③、⑩は反転項目)。

向上した項目の内、特に③、⑤の項目には明確な変容が表れている。

③は授業を「きゅうくつに感じる。」という質問項目である。この結果から、本実践で学習者の国語授業に対するマイナス要因を低減することができたことがうかがえる。

⑤は国語の授業を「楽しみにしている。」という質問項目である。学習者は、この実践を楽しみとして受けとめていたことが分かる。

(2) 論理的思考調査

ア 調査の目的

実践の授業効果を論理的思考という観点から分析した。

イ 「論理的思考調査法」の開発

教師が音読した説明的文章を録音テープにより生徒に聞き取らせ、その後、文章内容に関する六つの設問を記述式で回答させるという方法で論理的思考を測定した。

なお、実践前後の論理的思考を比較するため、文章と設問の両面で同じ構造をもつように配慮した二種類の調査法、「味噌課題」と「水質調査課題」を作成した。

二つの課題の同質性は、本実践に参加しない中学3年生計3クラスを被験者として検討を行った。調査は、一時間内に課題文章二つを聞き取らせた後、回答を二課題分続けて行うようにさせた。得られた対応する設問毎の正解、不正解数を比較し、精査した結果、明確な差異はみられなかった。このことより、二課題を同質と認め、実践におけるプレ・テスト、ポスト・テストとして採用した。

●論理的思考調査「味噌課題（抄）」（プレ・テスト）

アメリカで日本の食事を発表することになりました。私は味噌について調べました。味噌の調理法は「味噌汁」、「味噌和え」、「味噌漬け」です。味噌作りには、気温が高く、湿り気が多いときが、一番よいとされています。雪国では、雪解けの頃に、味噌作りを始めます。味噌作りの方法は、次のようにまとめられます。1, よく煮た大豆を、すりばちに入れてすりこぎで丁寧につぶす。2, つぶしたら、塩を加え、すりこぎでつくように混ぜる。3, こうじを加え、よく混ぜる。4, 大豆を煮たときの汁を少しずつ加えながらのぼす。熱い湯で消毒して乾いた瓶に詰める。5, すきまができないように、手で押す。6, 塩をふり、和紙でふたをして、冷たい場所に置く。

味噌は、各地の名前を付けた分類の仕方が知られています。信州味噌や、名古屋味噌、仙台味噌がそれです。材料による分類では、麦味噌、じゃがいも味噌、さつまいも味噌などがあります。また、色による分類では、赤味噌、白味噌などが知られています。あま味噌、から味噌、減塩味噌など味付けによる分類もあります。多くの味噌が日本にあるのは、昔から日本人が味噌についてのこだわりをもっていただけではないかと思われれます。

問1 なぜ、筆者は、味噌について調べたのですか。その理由を簡単に答えなさい。

問2 味噌の作り方で、よく煮た大豆を、すりばちに入れてすりこぎでつぶした後、こうじを加える前に入れなければいけないものは何でしたか。

問3 今読まれた文章の中に出てきた味噌を使った料理方法を全て答えなさい。

問4 味噌を分類する方法をいくつ筆者は挙げていましたか。答えなさい。

問5 なぜ、雪国の農家では、雪解けの頃に味噌作りを始めるのですか。理由を答えなさい。

問6 一箇所だけ筆者の推論が述べられている部分がありました。その内容を答えなさい。

●論理的思考調査「水質調査課題（抄）」（ポスト・テスト）

私たちは、ふだんいろいろな場所で、たくさんの種類の水を見えています。しかし、私たちは水をなんとなくきれいだとか、きたないとかという程度で見えていたに過ぎません。そこで、少しでも科学的に、これらの水を調べたいと思いました。

方法1：水に色がついていないかどうか、白い紙に透かしてみる。黄色っぽい色のときは、植

物の葉っぱのくさったものなどが多いためである。

方法2：ネスラー試薬を二、三滴加えて、よく振る。次に、白い紙を準備する。そして、試験管をその白い紙に透かしてみる。水が黄色くなるのは、アンモニア分があるからである。アンモニア分が濃くなるにしたがって、色は赤くなる。

方法3：硝酸銀溶液を四、五滴加えてよく振ってみる。白く濁るのは、塩素があるためである。

方法4：過マンガン酸カリ溶液一滴と硫酸一滴を加えて赤色にし、熱を加えてみる。色が消えるものほど、有機物の多い水である。

いろいろな場所の水を集めて調べました。荒川の水の場合は、アンモニア分、くさった葉っぱ、生活廃水などが多く含まれていました。お風呂屋さんの湯についても調べてみると、時間の経過とともにアンモニア分が増えていることが目立ちました。塩素は反対に減っていました。

このことは、湯の中に入れてある消毒の薬品が少なくなってきたためではないかと思えます。

問A 筆者はなぜ、水質調査をしようと考えたのでしょうか。

問B ネスラー試薬を加えて振る。アンモニアを見つける。この間で、やることは何でしたか。

問C 実験で分かった荒川の水に含まれていた不純物は何でしたか。全て答えなさい。

問D 筆者は水質を調べる方法を、何種類あげていましたか。

問E 銭湯では、主に水の何の成分の変化を見るために、調査を行ったのですか。

問F 文章中、筆者が推論をしている部分がありました。どんな内容でしたか。

「味噌課題」、「水質調査課題」のそれぞれの設問は、互いに調査内容が対応している。

問1と問A、問4と問Dは、それぞれ要点把握の力を推定する設問であるが、特に前者は動機を、後者は要点整理の力を推定した。問2と問Bは順序性把握の力を、問3と問Cは記銘の力を、問5と問Eは、論理の再構成の力を、問6と問Fは、事実と意見の識別の力をそれぞれみることにした。

ウ 結果

最も被験者の多い1年生（ $n=508$ ）の結果を紀要では検討する。「論理的思考調査」プレ・テスト、ポスト・テストの正解、不正解者数の比較を表2に表す。

表2 実践前後の「論理的思考調査」結果の比較

問番号	プレ	ポスト	問番号	プレ	ポスト	問番号	プレ	ポスト
1 A	正解 230	287	3 C	正解 300	392	5 E	正解 117	276
	不正解 278	221		不正解 208	116		不正解 391	232
2 B	正解 230	280	4 D	正解 107	431	6 F	正解 102	136
	不正解 278	228		不正解 401	77		不正解 406	372

※表中の数値は人数。 $n=508$ （中学1年生）

なお、問③Cは、二つ以上答えられた場合を正解とみなした。

表2からは、プレ・テストとポスト・テストの正解、不正解の出現数の比較では、全ての設問で明確な変容がみられ、全てポストの正解数が向上していることがうかがえる。

このように、本実践は、「論理的思考調査」にみる生徒の論理的思考を確実に高めたと言える。

Ⅲ 研究のまとめと今後の課題

本年度の研究主題は「生徒一人一人の関心・意欲を高め、論理的な思考を促す指導と評価の工夫」を「表現」の領域で重点的に取り組むことであった。実際授業を通して感じることは、多くの学習者は受け身的になりがちで積極的に自分の考えを表現することに乏しい。そのため、授業においては組織的に、効果的に意見や考えを交換し、深め合うことがなかなか困難である。主体的にものと考え、それを明確に伝えるということは、あらゆる社会生活における活動の基本、中枢であるだけに、国語科の果たしている役割はたいへん重要である。

本研究では、作文班と音声班にわかれて、具体的な指導法の工夫を実践的に取り組んだ。作文指導班では、読書感想文の指導を、機会あるごとに書きためたデータ作文と比較関連させることで本研究の主題に取り組んだ。従来の感想文指導の概念を越えて、論理的な思考力、論理的な展開を文章の表現の骨組みにしていっていったわけである。

まず、読書感想文に対する学習者の実態調査、ならびに学習者の感想文を分類、分析し、その結果を示すことで、なぜ学習者自身が感想文に抵抗を感じていたのかの自己評価が明確になると同時に、新たな学習目標を具体化することができた。それはまた書くことへの興味関心をもたせることになった。また、感想文の内容も自分の体験を書きためたデータ作文と作品を関連させて感想文を書くことにより、作品の読みが一層深まり、自己の認識を高めることにもつながった。その際活用したのが標準アウトラインであるが、それは、自分の考えを明確に表現させ、論理的な文章を書くうえでのひとつの有効な手段であったと思う。

今後の課題としては、それまで機会あるごとに書きためたデータ作文の蓄積法である。思考の深まりや拡がりの成長過程をまとめ、いつでも資料として活用していくことができるような内容面の蓄積法を考えたい。

音声言語指導班では、仮説「本授業をとおして論理的な思考力が高まり、生徒の関心・意欲を引き出すことができる」については、独自に実施した二種類の調査から次のようなことが言える。「論理的思考調査」の結果からは、すべての項目において数値が上昇していることから、聞き取りの力、論理的な思考の力が高まったと言える。このことについては、仮説は実証された。一方「関心度調査」では、「国語の授業を楽しみにしている」という項目については数値が上昇している。しかし、国語の授業は、「おもしろい」、「わかりやすい」、「自分にとってためになる」という項目ではマイナスの数値が出ている。生徒たちは、国語の授業を楽しみと感じ、聞き取りの能力が高まったと感じながらも、授業が分かりにくい、あまり役には立たないと自己分析している。そうした面を克服する手だてを講じることが今後の課題となる。

また、今回の調査では、論理的な思考の範囲を順序性、要点把握など六つの項目について測定した。しかしこれだけをもって論理的な思考のすべての面について測定したと言うことはできない。別の視点からの評価法の開発も必要になってくる。

最後に、実践の継続性の問題である。今回の短期間の授業実践でも確かな変容が生徒に見られた。今後も、三年間を見通した系統的、継続的な実践研究を進める必要がある。聞き取りトレーニングの方法や、それを発展させて、音声言語に関する能力とともに、論理的な思考の力、表現力を高める指導法の開発が大切である。